

〔研究ノート〕

学校英語か実用英語か(その2)

長谷川 恵 洋

本稿は前号「学校英語か実用英語か(その1)」(『阪南論集』人文・自然科学編, 22巻, 3号)に続く。前号で次の目次を示した。

目 次

- I 英語教育存廃論争
 - 1. 平泉・渡辺論争
 - 2. 戦前の論争
- II 日本人と英語
 - 1. 日本人にとって英会話とは何か
 - 2. 我が国の言語状況の特殊性
 - 3. 日本人は西洋語にどのように接してきたか
- III 学校英語と実用英語
 - 1. 実用英語とは何か
 - 2. 学校英語はなぜ必要か
 - 3. 大学入試と英語
 - 4. いかにして学校英語と実用英語を結合させるか
- IV 国際社会と英語教育
 - 1. 日本を孤立させてはならない
 - 2. 少数者だけ英語ができれば良いのか
 - 3. 安全保障としての英語力

前号では上記の目次の中で I と II について述べた。残りの III と IV について本号で述べる予定であったが、予想以上に長くなってしまったので、本号では III の 1 と 2 についてだけ述べ、以下は次号にまわす。

III 学校英語と実用英語

1. 実用英語とは何か

学校英語は実用性を欠くということがよく言われる。何年も費やして学校で英語を学んできたのに、多くの日本人は初等会話さえできない

という様なことが、くり返し言われてきた。これに対して、実用英語は、終戦以来、常に世間の脚光をあびてきた。とくに最近では、実用英語志向が強く学校英語への風当たりがきつい。II の 1 「日本人にとって英会話とは何か」の冒頭で、終戦直後における日本人と英会話との出会いについて言及したが、初等会話もろくにできない英語教師や大学教授と進駐軍の前でべらべらと英語を喋るパンパンガールとの対比は、多くの日本人に強烈なイメージを与えたと思われる。それは学校英語教育廃止論を正当化するのに充分な理由づけとなったかも知れない。

それにしても、なぜ進駐軍の前で学校英語が通用しなかったのだろうか。それは、世間で言われているように、学校英語教育と英語教師の不備によるものなのだろうか。確かに学校英語教育にまったく不備がないとはいえない。しかしそれだけが原因であるとは思えない。それでは他にいかなる原因があるのか。それについて考えるためには、そもそも世間で実用英語と言われているものが、いったいいかなるものであるかについて考えてみる必要がある。世間では実用英語志向の人が多いが、その人達の多くは、実用英語がいかなるものであるかという事をよく認識していないと思われる。

* 実用英語とは実際的な場面に結びついたものである

実用英語について考察するうえで最も重要なことは、それが実際的な場面に結びついたものだという点である。もちろん、英語を読んだり書いたりすることも、実用性という点から言って、英語を話すことと同程度に重要なのである

が、一般に世間で実用英語とよばれているものは、実際的な場面において運用される英語、いわゆる日常英会話をさすようである。実際的な場面といっても、外国旅行をした時に乗物の切符を買ったりレストランで注文したりすることから、国際会議で発表したりすることまで色々な段階があるが、学校英語が役立たないといって批難されるのは、日常的なレベルでの英会話ができないことに関してであろう。国際会議で発表したり通訳したりするというのは、専門知識の問題もからむし、学校英語を学んだすべての者がそのレベルの英語運用能力をもたないとしても、それを理由に学校英語教育を批難する人はいないだろう。むしろ巷で聞かれるのは、シェイクスピアが読めるのに、外国で乗物の切符を買うことさえできないといったたぐいの批難である。

日常的な会話においては、言語そのものの以外の要素すなわちその言語活動が行なわれている時の周囲の状況等が大きな機能を果たす。このことについて説明するために、多少冗長になるが、自ら外国で経験したことを実例として述べてみる。

恥しい話であるが、はじめてアメリカでハンバーガーの店に入ったとき、カウンター嬢がこちらを向いてぼそぼそと早口で言った英語が聞きとれなかった。何か一瞬のうちに(時間にして1/2秒ぐらいだろうか)「メアヘプユ？」と言ったらしいのだが、何のことか良くわからないままとにかくハンバーガーを買った。しかし二度目にまたその店に入ったとき、その「メアヘプユ？」は May I help you? と聞こえた。こちらの耳が良くなったと言う訳ではない。二度目ということでその場の状況の理解ができていたからであろう。一度目はその店がハンバーガー店かどうかはわからなかったのであるが、二度目は、一度目の経験からその店の様子がよくわかっていた。ハンバーガーの店はだいたい日本のと同じである。カウンター嬢がこちらを見て最初に発する言葉は、「何か御用ですか。」とか「何にしましょうか。」というよう

な言葉に決っている。そう思いながら「メアヘプユ？」を聴くと May I help you? に聞えたわけである。

もう一つ例を示す。イタリアを一人旅したときの体験談である。(以下の記述は長谷川恵洋「大学一般教育課程の英語教材について」阪南大学産業経済研究所研究所報 No. 13, 1984 による。)

ある有名な英文学者(故福原麟太郎氏)が、自分はスペイン語はまったくできないが、五つ六つの単語だけでなんとかスペインでたいていの日常的な用をたすことはできたと書いておられたが、それと同様の経験をイタリアでした。小生はイタリア語をまったく知らない。しかしにわか覚えた「ドーヴェ」(Where) という単語を一つひっさげて、毎日列車に乗って中世の町々をめぐる。例えば、ホームに入ってきた列車がどこ行きか知りたいときは、その列車を指差して「ドーヴェ？」と言えばよい。「ローマ行の列車は何番線に入りますか？」であれば「ローマ、ドーヴェ？」、街かどで自分の居る場所を知りたければ通りや建物を指差しながら「ドーヴェ？」、自分が地図上のどこに居るかが知りたければ、まず自分を指差して、次にその指で自分の地図を指差しながら、その地図を相手に差しだして「ドーヴェ？」。旅行者にとって場所の移動は最も大切なことのひとつであるが、これに関することは、目的地の名とドーヴェだけでたいていのことはすんでしまうといってもよいだろう。しかしこの場合、ドーヴェという言葉自体が万能の役を果しているのではなく、むしろ身ぶりや周囲の状況など言葉そのものの以外の要素がさまざまな伝達を可能にしているのである。実際のところ、外国で乗物の切符を買ったり場所を聞いたりする際にいかにしてその意志を伝達すればよいかという事は、その国の言語をどれだけ駆使できるかという事と余り関係ないのである。

ここでもう一度、初等英会話のできない英語教師とペラペラのパンパンガールの対比について考えてみよう。以上の例で述べたように、実

用英語が場面に対する依存性の高い言語活動であることを考慮すれば、それは別に不思議なことではないだろう。難しい英語の本は読めるが、余り書斎から出たこともないようなおとなしい英語の先生が、初めての慣れない外国旅行で、その国の習慣に不慣れであった為に切符一つ満足に買えなかったというような事があっても不思議なことではない。他方、パンパンガールが進駐軍の前でペラペラだったと言うが、はたして彼女達はどんな英語を喋っていたのだろうか。彼女達は、かりにほとんど英語ができなくてもそれなりにコミュニケーションはできたであろう。彼女達にとって、英語とは、伝達手段としてよりむしろファッションとしての機能を果すものだったとも考えられる。うだつのあがらない英語教師をしり目に、米兵とさっそうと闊歩する彼女達の姿は、かなり刺激的なものだったであろうが、それは言語活動そのものとはほとんど関係のないことである。少なくともそれが学校英語教育廃止論と連ならないことは確かである。

* 実用英語の難しさはヒアリングにある

学校英語が実用英語に結びつかない原因は他にもある。その最も問題となる点はヒアリングであろう。これも、実用英語が実際の場面において成立するというところに端を発していることであるが、学校英語が役に立たなかったという苦情の多くは、外人の発音が、教室で習ったのとかかなり違っているということであろう。英語には日本にない音素がたくさんあって、それらを発音することは決してたやすい事ではないが、発音の学習がある一定の段階以上に達したときに、多くの人には、こちらの言うことはなんとか解ってもらえるが、相手の言うことが解りにくいということを訴えるようである。英語の達人と言われている人も、口をそろえてヒアリングがむずかしいとおっしゃる。英語の聞き取りがなぜむずかしいのかということについて少し詳しく述べてみる。

先にカウンター嬢の「メアヘプユ」が聞き取れなかったことについて述べた。二度目には状

況判断によって May I help you? だと理解できたわけであるが、彼女の発音は二度目も物理的にはやはり「メアヘプユ」であったと思われる。彼女にしてみれば、一日中、何度も、客の顔を見るたびに言っているのである。いちいち「メイ アイ ヘルプ ユー」と言っていると疲れてしまう。エネルギーを節約するためには、どうしても「メアヘプユ」になってしまうだろう。

マーシャ・クラッカワーさんは『英会話あと一步』(光文社: カップ・ブックス, p. 41) で次のような話を紹介しておられる。

最近聞いた笑い話で、こんなのがありました。10年ぶりにハワイに行ったある大学教授が、ファースト・フードのお店でラーメンを頼んだら、Fokachopsticks? (フォカチョプスティックス) と店員に言われて、チンプンカンプン。

chopsticks だけですと、お箸のことだとわかりますが、その前についている foka がどうもわかりません。そこで、What did you say? と聞き返すと、また、Fokachopsticks? と返ってきます。特別なお箸なのかと思って困惑していると、順番を待っていた隣の坊やが、She's saying, fork or chopsticks. (フォークかお箸か、どっちがいいのって聞いているんだよ) と店員の言葉を通訳してくれたそうです。

人は日常会話において発話のためのエネルギーをできるだけ省略しようとする。同じ状況の中で同じ言葉を使う機会が何度もあるとすれば、その言葉を部分的に省略しようとするのは生理的に自然なことである。とくに、一定の場において話し手と聞き手の間でその場の状況についての把握がよくなされている場合には、その省略は最大限に行なわれることになる。省略形からもとの発話の意味を把握することは、それに慣れている人にとっては簡単なことであるが、慣れていない人にとってはかなり難しいこ

ともあると考えられる。状況に対する慣れということもあるが、省略された発話そのものの音的变化に対する慣れということも大きな要素である。

先に述べた マーシャ・クラッカワー さんの *Fokachopsticks?* の話には、さらに次のような言及がなされている。

ここでひとつ、面白いことがあります。外国人、つまり、われわれ日本人に馴染んでいないアメリカ人に、「今言ったことを、もう一度くり返してください。」と頼むと、意外なところで文を切ったり、ゆっくり言ったりすることが多いのです。先ほどの例を使いますと、*fokachopsticks* を彼らはゆっくりと、*fok-a-chop-sticks* 「フォーク・ア・チョップ・スティックス」のような具合で切ることでしょう。こちらが求めている「フォーク・オア・チョップスティックス」と個々の単語をはっきり発音してくれません。(前掲書 p. 42)

彼等が *fokachopsticks* と発音したのは、自分では *Fork or chopsticks?* と言っているつもりであるのに、それが速く発音されたために結果的に *fokachopsticks* になってしまったというのではなく、始めから彼等は *fokachopsticks* と言うつもりでそう発音しているのである。

我々日本人も、よく使う表現についてはしばしば省略を行なう。エネルギーを省略するという点では英米人とかわりはない。ただ、省略の仕方が異なる。日本語の省略は、マスコミ、ワープロ、カーキチといった具合に、適当に音節を省略して必要最小限の音節を残すことというものである。これらの省略は非常に自由奔放に行なわれるが、我々日本人は、これらの省略表現を聞いてそのもとの意味を把握することに慣れている。一般的な内容でない場合、すなわち、ある一定のコンテキストや場面の中だけでしか用いられないものもある。それらは、メアヘピュやフォカチョプスティックスが丁度そうであ

ったように、その場面についての認識がなされていないと理解しにくい。ある一時期だけ流行してすぐ消え去るものや、身内の者同志しかわからないものもある。若者の会話が中高年者にわかりにくいと言われるのも、省略表現の乱発が一因となっていると思われる。

しかし、日本語の省略表現は、意味がわからないときでも一応その発音を聞きとることはできる。ところが英語の省略表現は、我々にとって聞きとり自体が非常にむずかしい。おそらくこれは、日本語と英語のリズム構造が異っており、我々は英語のリズムに慣れていないということが大きな原因となっているだろう。日本語においても英語においても、話者はエネルギーを省略するために余剰部分を除去し必要最小限度の要素だけを残す。その際、日本語の省略表現においては、先述のように、あるいくつかの音節が完全に除去されるが、残された各音節の音節構造自体は変化しない。ところが英語の場合は、余剰部分が圧縮され、隣接する数音が相互に同化したり弱勢の母音が中舌化したりして、音節構造そのものが変化する。この変化が我々日本人にとっては非常にやっかいなのである。

英語の機能語(代名詞、助動詞、前置詞等)は、ゆっくり発音されるときと速く発音されるときとで音形が変化する。英語の通常の日常会話が聞きとれるようになるためには、その変化に慣れる必要がある。米語日常会話ではしばしば縮約形が用いられるが、池宮恒子, *On Immanent Prominence Which Appears in Contracted Forms of Americem Daily Conversation* (「米語短縮形にあらわれた内在的プロミネンスについて」帝塚山大学紀要第10号)に、縮約形についての次のような説明がある。例えば、*You should have come.* は縮約されて *You shoul'da* [ʃúdə] *come.* となる (*You should've* [ʃúdv] *come.* となることもある)が、ここでは *have* が [ə] と発音されている。すなわち、[ə] が *have* の最少要素として残ることにより、完了あるいは過去の意味を示す機能を果してい

るのであり、もしこの [ə] がなければ、You should come. という別の文になってしまうのである。しかも、you・to・of など、縮約形になったときの最小要素は [ə] である。したがってこの場合、理論的には、ネイティブ・スピーカーは [ə] を手がかりに have・you・to・of をそれぞれ識別していることになるが、単純な音節構造に慣れている我々日本人にとって、このように極端な音節構造の変化を把握し、ごくわずかな音素からもとの機能語を認識することは非常に難しいことである。

この場合、もちろん、[ə] だけを聞いているのではなく、その前後の語の組み合わせ、シンタックスについての知識等をよりどころとしているのであり、むしろ発話全体をひとまとまりとして把握して認識していると考えられるが、それにしても、単に各音素を表面的に並べることによって認識しているのではなくて、シンタックスについての知識を背景にして一つ一つの音素を有機的に把握して瞬間的に文全体を理解している訳であるから、それは我々日本人にとってはかなり至難のわざであると言える。

日本人にとって英語が聞き取りにくいのは、リズムおよび音節構造が異なるからであるという事について述べてきたが、このことを子音・母音という観点から説明してみる。日本語の音節パターンは、基本的には V (1 母音) か CV (1 子音 + 1 母音) である。日本語において、子音は必ず後続の母音と結合して CV という形で出現する。CV は、構造言語学に基づく音韻分析によれば、二音素の連続として分析されているが、我々日本人の耳には、V が単一の音の要素であるのと同じように CV も単一の音の要素として認知されているのではないだろうか。

英語の音節には子音で終わるものが多く、また、単語も子音で終わる場合が多い。フランス語では、語尾の子音は原則として発音されず、後続の語の語頭の母音と連なったときに初めて発音される。この現象は連音 (liaison) と称し、フランスでは発音のルールとして確定して

いるが、英語においてもよく似た現象の生じることがある。すなわち、語尾の子音は、ごくゆっくり話される場合を除いて、単独ではほとんど聞きとれず、むしろ後に続く弱勢音節のはじまりの母音とつながったときに聞えてくる。例えば、I'll be back in an hour. はアイルビバックインアンアウワーではなく、むしろアイルビバックインナンナウワー (I'll be back in an hour.) と発音されるが、CV という音節パターンに慣れている我々の耳には、子音と後続母音の連結した部分がどうしてもひとまとまりに聞えてしまう。すなわち、日本人は、back in an hour を聞いたときに [bæk in ən auə] とは捉えずに、[bæ ki nə nauə] と捉えてしまうのである。CV という音節パターンは、音節として非常に安定したものであるから、ネイティブ・スピーカーにも音声的には [bæ ki nə nauə] と聞えているのかも知れないが、意味的には [bæk in ən auə] と把握しているのである。我々の場合は、音声的のみならず意味的にも [bæ ki nə nauə] と考えてしまい、[bæ] とはどういう意味だろうとか [ki] とはどういう意味だろうかなどと思ってしまう傾向がある。さらに、back は back in 以外にも back out や back on など色々な母音との組み合わせが考えられるが、日本人の耳は、ka, ki, ku, ke, ko という変化に敏感に反応する習慣ができているから、back in, back out, back on を聞いたときに、back がそれぞれバックイン、バックアウト、バックオンと非常に異なったもののように入ってしまう。この場合、我々はバックという前の部分があるからなんとか back ということを認識しているが、この部分がなければさらに聞きとりにくいであろう。

以上、実用英語について、それが実際的な面に依存したものであること、その為に言語そのもの以外の要素が大きな役割を果たしていること、またその為に音声面において大きな変化や省略が生じることについて述べた。問題は、これらの事が非常に日常的なレベルの事象だということである。言語活動のいくつかの面

に限って言えば、日常性に近づけば近づくほど日本語の世界と英語の世界との格差は大きくなるのである。日本人は、書き言葉を通じて、ヨーロッパ語の世界をかなりの程度にまで日本語の世界に導入し、その翻訳文化を発展させてきた。しかし日常的なレベルの言語活動については、Ⅱの1「日本人にとって英会話とは何か」で述べたように、みような銜いを感じたり逆にひらきなおって軽視したりして、一種のわだかまりを持ち続けてきた。その反面、日常的な事柄は、抽象的で学問的な事柄に比べて低次元で容易なものであるとみなしてしまう傾向がある。日常的なレベルの言語活動はネイティブ・スピーカーにとっては比較的気楽なものであるかも知れない。しかし外国人にとっては、いっけん簡単そうに見えて実は必ずしも容易なものとは言えないのである。とくに発音面においては、日英語の音節構造が根本的に異っているために、ネイティブ・スピーカーが日常普通のスピードで喋っている英語が、日本人にとってはかなり聞きとりにくいものとなっている。その様な点を余り考慮しないで、表面的な事象だけを捉えて、シェイクスピアが読めても簡単な英会話ができないといったたぐいの批難がなされているのである。

2. 学校英語は何ぞ必要か

* 言語活動の本質とは

もし、外国人と簡単なあいさつをかわすことや外国旅行にいったときに切符を買ったりすることだけが目的であれば、学校英語や学校文法はあえて必要ないだろう。しかしこれらのことは、前節で述べたように、本質的な意味での言語活動そのものとは余り関係のないことである。日常的な場におけるある程度までのコミュニケーションは、文法の知識がなくとも可能である。ある場面の中で、その場面の範囲内で自己の意志を他者に伝えるだけであれば、犬や猫でもその鳴き声でかなりのことを伝達しあっている。しかし、犬や猫は昨日のことを伝達しあうことはできない。犬や猫の鳴き声は、時間的に

は、現在と近い未来のこと、空間的には、実際に居合わせている場面で生じていることしか伝達しえない。しかし言語は、ずっと昔のことやは今か将来のこと、また自分が居合わせていない場面での出来事について伝達することができる。言語はまた思考の道具でもあり、旧来の概念を組み立てて、新しい概念を発展させうる。言語によって人間は哲学や思想を構築し展開させてきた。言語によって人間は文明を生みだし過去の文化を後世に伝え発展させてきた。言語が言語たる所以はそこにある。

* 秘術としての学校文法

言語が言語としての機能を果たすためには、言語内に一定のルールが存在することが必要である。そのルールをネイティブ・スピーカーは無意識過程のうちに習得してしまっている。しかるに、日本人が日本語を習得した後に英語を学習する場合には、英語の文法構造の把握は意識的になされる必要がある。学校英文法は、それをできるだけ能率的になしうるための方法と考えられる。渡辺昇一氏は、『秘術としての文法』(大修館) p. 151 において、受験英語のおかげで、比較的短期間にかなり難しい英語が読めるようになり、英語の手紙も書けるようになったと述懐しておられる。氏によれば学校英文法は古代の文法学に通じるものであり、氏は文法学について次のように述べておられる。

文法学(文献学)は、時空を超越した精神の世界を啓示してくれる正に秘儀的な技術なのである。文法の翼に乗って、われわれは空間的にギリシャに飛び、時間的には二千数百年タイム・マシンを逆転させ、プラトンやアリストテレスがさながら眼前にあるが如くに対話することができるのである。これが魔術でなくて、一体、何が魔術の名に値いするであろうか。(『秘術としての文法』 p. 21)

伝統文法はラテン語文法に偏したもので、英語の真の姿を表わしていないという意見が構造言語学者の間にあるが、これまでの伝統文法の

流れの中で、無数の文法家達が出現し、それぞれが英語文法構造の本質を明らかにするための努力をし、それぞれの文法論を新たに展開してきたのであり、今日の学校英文法がラテン語に偏しているとは思えない。

*direct method の問題点

ネイティブ・スピーカーの場合、文法構造の習得は無意識過程であるから、我々日本人も彼等と同じような過程を想定して学習するべきだという考えがある。文法の説明はいっさい行なわないで、できるだけ日本語を用いずに英語だけに触れさせるという教授法が提案された。これは direct method (あるいは natural method) と称するものであり、学校においても導入されて一時流行したが、我が国においては決して成功したとは言えない。日本人のおかれた言語環境においては direct method は無理だったのである。この方法によってあいさつ程度の英会話はできるようになるかも知れないが、英語とまったく異なる文法構造の言語を用いている我々日本人が、多少なりとも英語で思考を構築するようになるためには、direct method は無理だったのである。

何ぞ direct method が我が国においては成功しなかったのか。direct method は伝統文法に比べると幼児が言語を習得する過程により近い。また direct method はヨーロッパ人が英語を学習する際には役立っている。これらのことを逆の面から考えれば、次の二つの理由がうかびあがってくる。第一に、母国語の学習と外国語の学習はそのプロセスがまったく異っているということ。第二に、日本語がヨーロッパ語とはまったく異った文法体系であるということである。

第一の理由について考える。外国語の学習にネイティブ・スピーカーの言語習得過程を模するという考えには論理の飛躍がある。子供がごく自然に無意識的に言語を習得するから、我々にもそのような状況を作ればよいというのは、論理の飛躍である。もし我々が幼児であればそれでよいのかも知れないが、実際のところ我々

は幼児ではないのである。幼児の場合は頭が白紙の状態でその言語の学習に入っていくが、我々の場合はすでに自国語を学んだ後であるので、どうしても自国語の干渉がともなう。我々も、いったん自国語のことを忘れて、幼児のように頭を白紙の状態にして、その外国語の世界に没入するように努力すればよいのではないか。direct method はそのような考えに基づいたものである。しかし結果的にそれは成功しなかった。おそらく我々の場合、自国語の語彙体形や文法構造がすでに頭に組みこまれており、意識的にそれらを打ち消そうとしても、無意識的に機能してしまうのであろう。

第二の理由について考える。あるドイツ人に、ドイツの学校ではどのようにして英語を学習しているのか聞いたことがあるが、どうも、小学生ぐらいの段階で、英語のラジオ放送などを聞いて、皆んなでそれについて英語でディスカッションするといった様子らしい。小学生だから完全な英語ではないだろう。しかし、そのようなことができること自体、我々とは根本的に状況の異っていることが実感される。彼等のように、いきなり曲がりなりにでも英語でディスカッションができれば結構楽しいだろう。我々の場合、direct method はどちらかというと退屈である。内容的にわかりきった事を延々とオーム返しで言ってみたり、機械的に単語を入れかえる練習をしたりするのは、非常に苦痛ですぐに教室がしらけてくる。ドイツ人のように最初からディスカッションができればよいが、我々の場合は言語体系のギャップが大きすぎる。日本語と英語のように語系・文化圏の離れた言語の場合は、ドイツ人が英語を学習するのはアプローチの仕方が根本的に異なるのである。

*幼児の母国語習得過程について

何ぞ direct method は成功しなかったのか。そのことについて考える前に、幼児が生まれてはじめて言語を習得する過程がいかなるものであるかということについて考えてみる。幼児にとっては、単語をひとつひとつ習得していくことは、単にひとつひとつの単語を覚えこんでい

くことではなく、頭の中で全体的かつ相対的に概念体系を形成していくことである。言語習得のごく初期の段階においては、あるひとつの単語を覚えることが、それまでに習得した概念体系のカテゴリー全体の組みかえであることもある。それはあたかも白地のキャンパスに絵を描いていくようなものである。ひと筆のタッチを描き入れた為に、それまでの絵の様子が変わることもある。

幼児にとって、言語学習とは幼児をとりまく全世界・全宇宙の認知そのものである。幼児の頭脳の中で、宇宙と言語が有機的に絡みあって把握されていく過程である。幼児にとって、あるひとつの単語を知ることとはひとつの新らたな発見である。例えば、生まれてはじめて池に魚が泳いでいる姿を見ることは、ひとつの感動である。その感動の結果として、魚という単語を覚えるのである。

* 成人の外国語学習に direct method は用いるか

成人が外国語を学習する過程とはいかなるものであろうか。はたして幼児の母国語習得過程をそのままあてはめることができるであろうか。もしあてはめ得るとすれば、理論的には次のようになる。それはすでに獲得した母国語の概念体系を意識的に忘れるところから始まる。それは、いったん頭を白紙の状態にしておいて、すでに描いた母国語の世界とは独立に外国語の世界を描いていくことである。

これは理論的には可能かも知れない。しかし実際には、日本人の成人を、英米人の幼児が体験するのとまったく同じ環境に置いてみるということは、物理的にほとんど不可能なことである。幼児は、母国語を習得するために、数年間、毎日、朝から晩までその言葉にさらされる訳であるが、我々がそのような環境を得ることはほとんど不可能である。また、たとえそれができても、精神的な拒絶反応が生じると思われる。先述のように、どうしてもすでに習得した日本語が干渉するであろう。

池に魚が泳いでいるのを見たとき、幼児はそ

の姿を見て感動し、どうしてもそれを一つの言葉に同定 (identify) せざるをえない心情になり、その必然的な結果として一つの言葉を覚えるのである。しかるに我々の場合は、もうすでに「魚」という日本語を知っている。それを無理に忘れ去って、'fish' という英語と池を泳いでいる魚を直接結びつけるというのは、かなり努力を用することである。それは、natural method というよりむしろ unnatural method と言わなければならない。

言語学習にはモチベーションが大切である。我々は、日常的なことに関しては日本語の概念体系がもうすでにできあがっている。すでに了解していることを、もう一度、英語でくり返して体験しなおすというのは、非常に冗長に感じられるであろう。それは言語行為として必然性が希薄であり、感動がともないにくいであろう。概念形成は段階的になされるが、我々成人は、抽象的概念を展開し、哲学的なことや思想的なことに興味を示す段階にすでに達している。

日常的表現がやさしいという訳ではない。むしろ、日常の基本的な表現には、その言語圏独自の文化的背景が投影されていることが多く、とくに外国語学習の際には、言語間の誤解が生じやすい。言語のみならずその言語の背景となる文化そのものが干渉するからである。言語の習得とは、言語と同時にその言語の織り成す文化の習得でもある。人間は、言語によって宇宙を諸概念に分割し、また言語によってその諸概念を統合することによって、宇宙を認識しているわけであるが、文化の相異とは、その概念分割の仕方の相異でもある。言語習得の初期の段階は、その言語独自の宇宙認識構造とのかかわりが特に深いと考えられる。

direct method が主唱するように、日本語を使わないで英語を学習しようという場合に、日本語の形態の構造を意識的に忘れ去ることは、ある程度、可能であろう。しかし、日本語による概念分割構造を頭脳から消し去ることは不可能である。したがって、direct method と称し

て気持の上では日本語を使っていないつもりであっても、実際には英語を日本語の概念体系にあてはめていることが多い。その場合、日本語を使って簡単に説明できることを、日本語を使わないために非常にまわり道していることがある。こんな笑い話がある。direct method で‘rose’ という単語を教えようと思って、実際に赤いバラを教室に持ち込んで “This is a rose.” と説明したが、ある生徒は、教師の意図に反して ‘rose’ とは「赤」の意味だと考えてしまったのである。

* 学校英語による英語学習とは

伝統的な学校英語の方法においては、すでに習得した日本語の概念体系がそのまま前面に押し出される。すなわち、ある英単語の意味を理解するために日本語を用いて説明することを是とする。‘rose’ という英単語を教えるために実際のバラを見せる必要はない。‘rose’ が日本語では「バラ」と訳されることを説明すれば良いのである。

日本語と英語の間には概念体系にずれがある。学習の初期の段階においては、そのずれは承知の上で、各英単語をそれらに相当すると思われる日本語に置きかえることによって理解しなければならない。すなわち、言語形態は英語であるが概念体系は日本語であるという状況である。やがて学習がある程度の段階に達し、英語の語彙数がある程度の数になり、日本語を離れて英語だけで思考を展開することができるようになる。その段階で、序々に英語独自の概念体系に軌道修正されていくことになる。このような過程は、非常に冗長なように思われるかも知れない。しかし、日本人が日本語を習得した後に英語を学ぶというのは、あくまでも外国語を外国語として学習するのであり、日本語と英語がまったく異った語彙体系・文法構造の言語であることを考慮すれば、この方が合理的だと思われる。

以上に述べたように、日本語と英語は概念体系が異なる。そのずれは、語彙面だけでなく統語構造の面においても著しい。日本人にとって

特にむずかしいのは、性・数・時制といった西洋語の文法概念である。現代英語は他のヨーロッパの言葉と比べてそれらの語形変化は簡単になっているが、それでも若干残っている。例えば、「鉛筆を貸して下さい。」あるいは「窓の外に木が見えます。」と言う時に、我々日本人には、その鉛筆や木は何本であってもいいのである。ところが西洋人は、一本(単数)か二本以上(複数)かということを厳密に区別する。彼等の言語が宇宙をそのように分析するように作られているからである。しかも、いったん主語が単数か複数かに定まれば、述語もそれに応じて連鎖的に変化する。これらのことを、西洋人はごく自然にほとんど無意識的に行う。それが彼等の言語の習慣となっているからである。

しかるに、我々日本人にとって、西洋語の性・数・時制といった文法カテゴリーを正しく運用することは至難のわざである。ちょっとやそつのことでマスターできない特別な技能であると言ってもよいだろう。英語を学習するにあたって、その難しい文法カテゴリーは無視してはどうかという意見もある。なかなかマスターできないことであるし、日常的なコミュニケーションであれば、文法を無視してもたいした誤解は生じない。実際的な場面では、文法など考えずに単に単語を並べた方がよく通じることもある。現に、ピジンイングリッシュのような例もある。しかし学校英語はそれを潔しとしなかった。文法を無視したのであれば、言語を習得したことになる。学校英語は文法を正確に身につけることをめざした。ここで再びペラペラのパンパンガールと初等英会話のできない英語教師について言及するが、パンパンガールは複雑な文法カテゴリーにあまり気をつかわなくて良かったであろう。しかし英語教師はそれを無視することはできなかった。そのへんの差が大きい。

性・数・時制といった文法カテゴリーは、西洋語における、日本語と異質な面が、最も顕著に反映した部分であり、我々日本人にとって最も把握しにくい部分である。しかもこれらは、

言語学習の最終的段階において認識すればよいことではなくて、導入期においてそのすべてを把握しておくべきことなのである。なぜならば、文法構造はそのすべてが全体として有機的に絡みあって構成されており、西洋語に独自な部分は、言語構造の最も基礎的な部分に集約されて最も顕著に表わされているからである。これらのことを幼児は自然に無意識的に習得するのであるが、成人がそれと同じ過程で学習するのは困難である。先述のように、幼児と同じ状況を作るのが物理的に困難であるし、もしそれができてすでに習得した母国語の概念体系が干渉する。

先述のように、文法事項としての数 (number) の概念は日本語には存しない。我々日本人も日常生活において物の数を問題にすることはあるが、そうでない場合に、単数・複数の区別をするのは我々には非常に奇異に感じられる。しかも、単数・複数の区別はただそれだけに留まらず、他の文法事項と有機的につながっている。すなわち、文法体系全体の中の一環として機能している。日本語と英語とでは宇宙の分析の仕方が根本的に異なるのである。幼児は母国語にふれる過程において自然かつ無意識的にその言語の宇宙感を形成していく。しかるに、すでに日本語の宇宙感を身につけた者が英語を学習する場合には、最初に英語の宇宙感をなわち英語の文法構造を説明してもらう必要がある。その方が能率的と思われる。幼児のようにただ漠然と英語にさらされても、成人の場合、英語の宇宙感は形成されにくい。学校文法はその説明の為に formula (方式、公式) である。

* 文法構造の認識は最終的には無意識過程となるべきである

これまで、成人の英語学習が意識的過程として開始されるべきことを強調してきたので、誤解をさけるために述べておくが、最終的には成人の場合も文法構造についての認識は無意識過程となるのが望ましい。

文法の知識とは、単に文法用語を覚えること

ではない。文法用語を覚えることは便宜上必要ではあるが、そのこと自体が目的ではない。文法はあくまでも手段でありそのこと自体が目的になってしまてはいけない。一連の言語活動における文法構造の把握は、最終的にはネイティブ・スピーカーのような無意識過程に近づくのが望ましい。いちいち、主語が三人称単数であるから次に動詞を言うときもし現在だったら s をつけねばならないなどと考えていたら、とても自由な会話はできないし、英語を自由に読みこなすことも書くこともできない。

幼児の言語習得過程と成人の言語習得過程を、それぞれ歩行を習得する過程と自動車の運転を習得する過程に例えてみるができる。幼児はある時期がくれば自然に歩けるようになる。その際、幼児に歩き方を説明する必要はない。左右の脚を交互に前進させ、身体全体でバランスをとりながら、たおれないように進んでいくというのは、コンピューターもうまくまねることのできないかなり難しい動作であるが、それを幼児は、あたかもその動作のためのプログラムが身体にくみ込まれているかのように自然に習得する。

これに対して、成人の外国語学習は自動車の運転を学ぶ過程に例えてみるができる。まず最初に、アクセルやブレーキの踏み方、ハンドルの切り方を説明してもらう必要がある。幼児の場合のように無意識過程という訳にはいかない。この場合、何んの説明もなしに試行錯誤で学んでいくというのは非能率的である。しかし、一応の説明をしてもらった後に、道路上で安全に運転するためには、最終的には、それらの操作はある程度反射運動として無意識的に行なわれるようになっていく必要がある。いちいち、人が左手を歩いているから、それをさける為にはハンドルを右へ切らなければならない、などと考えていてはとっさの時に間にあわない。

いまここで、アクセル、ブレーキ、ハンドルの操作法に例えて説明したのは文法のことである。そしてこの場合の文法とは、専門的な文法

家や言語学者でなければ把握できないような複雑なものではなく、誰でも一瞬のうちにその全体構造を把握しようようなものでなければならぬ。それは、渡辺昇一氏が「秘術としての文法」と述べたものである。具体的に言えば、学校文法の八品詞や五文型のことである。

アクセル、ブレーキ、ハンドルの操作そのものは非常に単純である。アクセルのペダルを踏み込むと加速し、ブレーキを踏み込むと減速する。ハンドルをまわすとそれに応じて進む方向が変わる。しかし、自動車の走行のために必要な動きのすべては、これらの単純な操作の組み合わせによってなされる。アクセル、ブレーキ、ハンドルの操作自体は簡単であるが、単にそれらの動かし方を知っているというだけで、自動車の運転ができるということにはならないだろう。それらの操作がほとんど無意識のうちになされる段階になってはじめて、自由に運転ができるようになったと言える。

英語の学習において、文法の説明を聞いて一応納得したというのは、それで学習が完成したというのではなく、むしろそこから学習が始まると考えるべきである。文法をマスターするというのは、単に文法を理解するだけでなく文法を使いこなせるようになることである。英語を実際に運用するにあたって、いちいち文法のことを意識していなければならないようでは間に合わない。

言語は意味と形態より成り立っているが、言語活動において意識上にあがってくるのは、個々の単語の意味内容と、個々の単語が結びつきあうことによって形成されるさらに上位レベルの意味構造である。この際の単語の結合の仕方を形態的構造によって示したものが文法であるが、それをネイティブ・スピーカーは無意識的に認識していると考えられる。我々が英語を外国語として学ぶ場合も、文法構造の認識は、最終的にはできるだけ無意識過程となるのが望ましい。もしそうでないとすると、言語活動の意識的側面である意味の把握や思考の展開がスムーズに行なわれにくいからである。

* 橋渡しとしての英語力

以上においては、幼児期における母国語学習と、母国語習得後の外国語学習を対比させて考察してきたが、幼児期に二つもしくはそれ以上の言語に接した場合について考えてみる。幼児期に海外で完全な二重言語生活を体験したり、早期教育として英語を学び、それがうまく成功した場合には、自然な英語が身につく、とくに発音はネイティブ・スピーカーなみにできるようになると言われている。ただし問題がないとは言えない。こんな人を知っている。彼女は帰国子女で、ある有名大学の学生である。彼女は日本語もフランス語も上手である。双方の言語で知的な会話ができるし、読み書きも自由である。しかし仏文和訳と和文仏訳があまりできない。あるフランス語の単語の意味をフランス語として理解していても、それにできるだけ近い意味の日本語は何かと問われた場合に、適当な日本語が思い浮かばないらしい。

当然である。彼女は日本の学校でフランス語を学んだのではなく、フランス人が母国語としてフランス語を学習するのと同じ状況でフランス語を身につけたのである。言語学習過程において、フランス語を日本語に訳したり日本語をフランス語に訳したりするということを経験していない。頭脳の中でフランス語と日本語は別個に存在しており互いに干渉しあうことがない。

考え方によれば、我々の様に日本に居て外国語を学習する者は、彼女の様な言語活動が行えるのを理想の姿としている。そしてそのための努力をしても結局は彼女のように成れないのが我々である。しかしそれはある意味では怪我の功名と言える。Ⅱの2で述べたように、あくまでも我々日本人の置かれている言語状況は特殊なのである。日本においては、日本語の文化が余りにも歴然として存在している。日本社会において英語力が求められるのは、英語を英語として運用する能力よりも、英語を日本語に、日本語を英語に変換する能力であることの方がはるかに多い。外国人と観談するのは楽しいこと

である。しかししたいの場合それは趣味としてである。日本に居る限り、必要にせまられてその能力を求められるということはほとんどない。彼女のように、フランス語はフランス語として日本語は日本語として自由に運用できるという人は、一個の知識人としての価値は大きい。日本語を外国語に外国語を日本語に変換するという、外国語エキスパートに求められている重要な任務を、十分に果すことができない。一個の文化人として、日本文化と外国文化の橋渡しとしての役割を担うことはできるであろうが、外国語のエキスパートとして余り多くのことを期待することはできない。

英語学習の初歩的段階においては日本語の助けが必要であるが、ある程度の段階に達した時、英語が日本語を離れて一人歩きするようになると先に述べた。英語を自由に読みこなしたりスムーズに英会話ができるようになるためには、日本語を離れて英語だけで思考できるようになることがぜひ必要である。しかしそれからさらに次の段階がある。すなわち、エキスパートとしての英語力を機能させるためには、再び、日本語とのつながりにおいて英語を考える必要が生じてくる。すなわち、日本語と英語の橋渡しをする能力が要求されることになる。

その為には、矛盾したことを述べるようだが、英語学習過程において、日本語を忘れて英語に集中する努力をすると同時に、他方において、日本語と英語の双方の世界に同時に目を向けて、そのつながり方について考察する必要もある。日本人が日本人として英語を学習する場合、できるだけネイティブ・スピーカーに近い英語力を身につけるように努力するだけでなく、英語を外国語としてみつめることも大切である。このように、日本語の世界と英語の世界とのほざまで苦悩しながら英語を学習していくというのは、一部の英語エリートだけに課せられたことではなく、英語を学習するすべての日本人に必要なことである。そうすることによって、外国語文化を身をもって体験し、日本語文化と外国語文化の違いを認識することができる

からである。

* 本当に学校英語は不振か

そもそも学校英語の不振をうったえる発言には誇張が多い。シェイクスピアが読めるのに外国で乗物の切符を買うことさえできないといったたぐいの批難は、学校英語と実用英語の格差を強調するためのレトリックと言えよう。このような発言がいまだに巷で聞かれるのは、はなはだしい時代錯誤である。明治の頃ならいざ知らず、今日シェイクスピアの研究をしている人で英語がほとんど喋れない人というのは存在しない。初等英会話ができない英語教師や大学教授とペラペラのパンパンガールを何度か対比させたが、これもレトリックである。現在、初等英会話のできない英語教師や大学教授はほとんどいないだろう。むしろ、大学教授にしておくのはもったいないような、かなりの英会話能力をもったかたが多い。

我々はかなり長時間、英語を勉強しているのに、なかなかうまくならないと言うが、ネイティブ・スピーカーが英語にさらされている時間に比べると、我々が英語と接する時間はごくわずかである。その時間数の割合からすれば、我々の英語能力はそれほど劣っているとは思えない。幼児はごく自然に母国語を学び、我々成人は何年も外国語を学習しても上達しないと言われるが、これもレトリックである。幼児が母国語を習得するためには、数年間、終日その言語にさらされるのである。我々が学校で外国語を学習するのは、たとえそれが中学・高校の六年間であっても、時間数から言えば、幼児の場合と比べて微々たるものである。そもそも我々は、幼児のようにじっくりと学んでいる時間的余裕がないのである。時間数から言えば、我々は、幼児に比べてかなり密度の濃い言語学習を行っていると言ええる。

世間で、有数な英語の達人、英語の使い手と言われている人は、自分ではそうおっしゃらない場合もあるが、自ら学校英語を大切にしていた人達である。学校英語教育廃止論者である平泉渉氏自身も、渡辺昇一氏が『英語教育大論

争』p. 84 で指摘されているように、旧制中学の英語と受験英語によってその抜群の語学力を身につけられた人である。松本道弘氏は、受験英語には多少の難色を示しておられるが、学校英語そのものは大切にされてこられたにちがいない。「* 橋渡しとしての英語力」で述べたことから明らかなであるが、もし松本氏が学校英語

によらないで英語を身につけられたのだとすれば、氏が単なる英会話の上手な人とはなりえても、同時通訳の第一人者とはなりえなかったと思われる。

(未完)

(1986年12月19日受理)